

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

24.06.03

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日
Date of Application: 2002年 6月24日

出願番号
Application Number: 特願2002-183233

[ST. 10/C]: [JP2002-183233]

出願人
Applicant(s): 三菱レイヨン株式会社

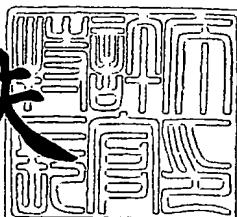
REC'D 08 AUG 2003
WIPO PCT

PRIORITY DOCUMENT
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH
RULE 17.1(a) OR (b)

2003年 7月25日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

今井康夫



【書類名】 特許願

【整理番号】 P140344000

【提出日】 平成14年 6月24日

【あて先】 特許庁長官 殿

【国際特許分類】 G02F 1/01

G02F 13/04

【発明者】

【住所又は居所】 神奈川県川崎市多摩区登戸3816番地 三菱レイヨン
株式会社東京技術・情報センター内

【氏名】 山下 友義

【発明者】

【住所又は居所】 神奈川県川崎市多摩区登戸3816番地 三菱レイヨン
株式会社東京技術・情報センター内

【氏名】 千葉 一清

【特許出願人】

【識別番号】 000006035

【氏名又は名称】 三菱レイヨン株式会社

【代表者】 皇 芳之

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 010054

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 光源装置

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 一次光源と、該一次光源から発せられる光を入射する対向する2つの光入射面及び入射した光を導光して出射する光出射面を有する導光体と、該導光体の光出射面側に隣接配置された光偏向素子とを有する光源装置において、前記光偏向素子が、光を入射する入光面とその反対側に位置し入射した光を出射する出光面とを有しており、前記入光面には2つのプリズム面から構成されるプリズム列が互いに略並列に複数配列され、前記プリズム面が少なくとも2つの傾斜角の異なる平面からなり、前記出光面に近い側に位置する平面ほどその傾斜角が大きく、前記出光面に最も近い平面の傾斜角と前記出光面から最も遠い平面の傾斜角の差が15度以下であることを特徴とする光源装置。

【請求項 2】 前記2つのプリズム面が少なくとも3つの傾斜角の異なる平面からなることを特徴とする請求項1に記載の光源装置。

【請求項 3】 一次光源と、該一次光源から発せられる光を入射する対向する2つの光入射面及び入射した光を導光して出射する光出射面を有する導光体と、該導光体の光出射面側に隣接配置された光偏向素子とを有する光源装置において、前記光偏向素子が、光を入射する入光面とその反対側に位置し入射した光を出射する出光面とを有しており、前記入光面には2つのプリズム面から構成されるプリズム列が互いに略並列に複数配列され、前記プリズム面が少なくとも2つの傾斜角の異なる凸曲面からなり、前記出光面に近い側に位置する凸曲面ほどその傾斜角が大きく、前記出光面に最も近い凸曲面の傾斜角と前記出光面から最も遠い平面の傾斜角の差が15度以下であることを特徴とする光源装置。

【請求項 4】 一次光源と、該一次光源から発せられる光を入射する対向する2つの光入射面及び入射した光を導光して出射する光出射面を有する導光体と、該導光体の光出射面側に隣接配置された光偏向素子とを有する光源装置において、前記光偏向素子が、光を入射する入光面とその反対側に位置し入射した光を出射する出光面とを有しており、前記入光面には2つのプリズム面から構成されるプリズム列が互いに略並列に複数配列され、前記プリズム面が少なくとも1つ

の平面と少なくとも1つの凸曲面からなり、前記出光面に近い側に位置する平面または凸曲面ほどその傾斜角が大きく、前記出光面に最も近い平面または凸曲面の傾斜角と前記出光面から最も遠い平面または凸曲面の傾斜角の差が15度以下であることを特徴とする光源装置。

【請求項5】 前記プリズム面が少なくとも2つの傾斜角の異なる平面と少なくとも1つの凸曲面からなることを特徴とする請求項4に記載の光源装置。

【請求項6】 前記凸曲面の形状がそれぞれ異なることを特徴とする請求項3～5のいずれかに記載の光源装置。

【請求項7】 前記凸曲面の曲率半径（r）とプリズム列のピッチ（P）の比（r/P）が2～50であることを特徴とする請求項3～6のいずれかに記載の光源装置。

【請求項8】 前記凸曲面の少なくとも1つが非球面形状であることを特徴とする請求項3～7のいずれかに記載の光源装置。

【請求項9】 前記平面および／または凸曲面が、プリズム頂部からの高さhの領域に少なくとも2つ形成され、プリズム列の高さをHとしたときh/Hが10%以上であることを特徴とする請求項1～8のいずれかに記載の光源装置。

【請求項10】 前記平面および／または凸曲面とプリズム頂部とプリズム底部とを結ぶ仮想平面との最大距離（d）のプリズム列のピッチ（P）に対する割合（d/P）が0.4～5%であることを特徴とする請求項1～9のいずれかに記載の光源装置。

【請求項11】 前記プリズム列の頂角が35～80度であることを特徴とする請求項1～10のいずれかに記載の光源装置。

【請求項12】 前記プリズム列の頂角の一方の振り分け角 α が25～40度であり、他方の振り分け角 β が25～40度であることを特徴とする請求項1～11のいずれかに記載の光源装置。

【請求項13】 前記2つのプリズム面の振り分け角 α 、 β が異なることを特徴とする請求項1～12のいずれかに記載の光源装置。

【請求項14】 前記光偏向素子から出射した出射光輝度分布において、輝度がピーク輝度の70%となる出射光分布幅（θ70）が10度以上であること

を特徴とする請求項1～13のいずれかに記載の光源装置。

【請求項15】 前記光偏向素子から出射した出射光輝度分布において、輝度がピーク輝度の90%となる出射光分布幅(θ_{90})と輝度がピーク輝度の20%となる出射光分布幅(θ_{20})との比(θ_{20}/θ_{90})が5以下であることを特徴とする請求項1～14のいずれかに記載の光源装置。

【請求項16】 前記光偏向素子の出光面上に、平行光を入射したときの出射光光度分布の半值全幅が1～13度である光拡散素子を隣接配置したことを特徴とする請求項1～16のいずれかに記載の光源装置。

【請求項17】 前記光偏向素子の出光面上に、ヘイズ値が8～82%である光拡散素子を隣接配置したことを特徴とする請求項1～16に記載の光源装置。

【請求項18】 前記光偏向素子の出光面上に、少なくとも一方の面の平均傾斜角が0.8～1.2度である光拡散素子を隣接配置したことを特徴とする請求項1～17のいずれかに記載の光源装置。

【請求項19】 前記光拡散素子は平行光を入射したときの出射光光度分布の半值全幅が異方性を有していることを特徴とする請求項16～18のいずれかに記載の光源装置。

【請求項20】 前記光拡散素子は平行光を入射したときの出射光光度分布の最大半值全幅が最小半值全幅の1.1倍以上であることを特徴とする請求項16～19に記載の光源装置。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、ノートパソコン、液晶テレビ、携帯電話、携帯情報端末等の表示部として使用される液晶表示装置等を構成するエッジライト方式の光源装置に関するものであり、特に、比較的大きなサイズの液晶表示装置等で好適に使用される導光体の対向する2つの側端面にそれぞれ一次光源を配置した光源装置に関し、観察方向の変化による大幅な輝度の低下を招くことなく、極めて高い輝度が得られる光源装置に関するものである。

【0002】**【従来の技術】**

近年、カラー液晶表示装置は、携帯用ノートパソコンやパソコン等のモニターとして、あるいは液晶テレビやビデオ一体型液晶テレビ、携帯電話、携帯情報端末等の表示部として、種々の分野で広く使用されてきている。また、情報処理量の増大化、ニーズの多様化、マルチメディア対応等に伴って、液晶表示装置の大画面化、高精細化が盛んに進められている。

【0003】

液晶表示装置は、基本的にバックライト部と液晶表示素子部とから構成されている。バックライト部としては、液晶表示素子部の直下に光源を配置した直下方式のものや導光体の側端面に対向するように光源を配置したエッジライト方式のものがあり、液晶表示装置のコンパクト化の観点からエッジライト方式が多用されている。

【0004】

ところで、近年、液晶表示装置等では、消費電力の低減の観点からエッジライト方式のバックライト部として、一次光源から発せられる光量を有効に利用するために、画面から出射する光束の広がり角度をできるだけ小さくして所要の角度範囲に集中して光を出射させるものが利用されてきている。

【0005】

このように観察方向範囲が限定される表示装置であって、一次光源の光量の利用効率を高め消費電力を低減するために比較的狭い範囲に集中して光出射を行う光源装置として、本出願人は、特開2001-143515号において、導光体の光出射面に隣接して両面にプリズム形成面を有するプリズムシートを使用することを提案している。この両面プリズムシートでは、一方の面である入光面及び他方の面である出光面のそれぞれに、互いに平行な複数のプリズム列が形成されており、入光面と出光面とでプリズム列方向を合致させ且つプリズム列どうしを対応位置に配置している。これにより、導光体の光出射面から該光出射面に対して傾斜した方向に出射光のピークを持ち適宜の角度範囲に分布して出射する光を、プリズムシートの入光面のプリズム列の一方のプリズム面から入射させ他方の

プリズム面で内面反射させ、更に出光面のプリズム列での屈折作用により、比較的狭い所要方向へ光を集中出射させる。

【0006】

【発明が解決しようとする課題】

しかし、このような光源装置によれば、狭い角度範囲の集中出射が可能であるが、出射光分布が極端に狭く、観察方向が少し変わるだけで大きな輝度の低下を招くものであり、比較的サイズの大きい光源装置では実用性に劣るという問題点を有していた。また、光偏向素子として使用されるプリズムシートとして両面に亘り平行な複数のプリズム列を、入光面と出光面とでプリズム列方向を合致させ且つプリズム列どうしを対応位置に配置することが必要であり、この成形が複雑になるものでもあった。

【0007】

また、導光体から出射された光をプリズムシートを用いて偏向させる際に、光の集光性や指向性を高めること等を目的として、プリズムシートを構成するプリズム列の光源から遠い側のプリズム面を凸曲面形状にすることが、特表平9-507584号公報、特開平9-105804号公報、特開平11-38209号公報、特願2000-35763号公報に提案されている。しかし、これらに記載されている凸曲面形状のプリズム面は、いずれもその曲率半径が比較的大きいものあるいは比較的小さいものであるため、導光体からの出射光分布を十分に狭視野化できなかったり、極端に狭視野化されたり、場合によっては逆に広視野化されたりするものであった。また、これらに記載されている導光体は、その出射機構が高い指向性を付与できるものではなく、出射光分布の比較的広い光が出射されるため、プリズムシートで光を集光させたとしても十分な輝度の向上を達成できるものではなかった。

【0008】

そこで、本発明の目的は、高い集光効果による輝度の向上を図るとともに、観察方向の変化に対する輝度の低下が小さく、一次光源の光量の利用効率の向上が可能となり（即ち、一次光源から発せられる光を所要の観察方向へ集中して出射させる効率が高くなり）、しかも簡素化された構成で画像品位の向上が容易な

光源装置を提供することにある。

【0009】

【課題を解決するための手段】

すなわち、本発明の光源装置は、一次光源と、該一次光源から発せられる光を入射する対向する2つの光入射面及び入射した光を導光して出射する光出射面を有する導光体と、該導光体の光出射面側に隣接配置された光偏向素子とを有する光源装置において、前記光偏向素子が、光を入射する入光面とその反対側に位置し入射した光を出射する出光面とを有しており、前記入光面には2つのプリズム面から構成されるプリズム列が互いに略並列に複数配列され、前記プリズム面が少なくとも2つの傾斜角の異なる平面からなり、前記出光面に近い側に位置する平面ほどその傾斜角が大きく、前記出光面に最も近い平面の傾斜角と前記出光面から最も遠い平面の傾斜角の差が15度以下であることを特徴とするものである。

【0010】

また、本発明の光源装置は、一次光源と、該一次光源から発せられる光を入射する対向する2つの光入射面及び入射した光を導光して出射する光出射面を有する導光体と、該導光体の光出射面側に隣接配置された光偏向素子とを有する光源装置において、前記光偏向素子が、光を入射する入光面とその反対側に位置し入射した光を出射する出光面とを有しており、前記入光面には2つのプリズム面から構成されるプリズム列が互いに略並列に複数配列され、前記プリズム面が少なくとも2つの傾斜角の異なる凸曲面からなり、前記出光面に近い側に位置する凸曲面ほどその傾斜角が大きく、前記出光面に最も近い凸曲面の傾斜角と前記出光面から最も遠い凸曲面の傾斜角の差が15度以下であることを特徴とするものである。

【0011】

さらに、一次光源と、該一次光源から発せられる光を入射する対向する2つの光入射面及び入射した光を導光して出射する光出射面を有する導光体と、該導光体の光出射面側に隣接配置された光偏向素子とを有する光源装置において、前記光偏向素子が、光を入射する入光面とその反対側に位置し入射した光を出射する

出光面とを有しており、前記入光面には2つのプリズム面から構成されるプリズム列が互いに略並列に複数配列され、前記プリズム面が少なくとも1つの平面と少なくとも1つの凸曲面からなり、前記出光面に近い側に位置する平面または凸曲面ほどその傾斜角が大きく、前記出光面に最も近い平面または凸曲面の傾斜角と前記出光面から最も遠い平面または凸曲面の傾斜角の差が15度以下であることを特徴とするものである。

【0012】

【発明の実施の形態】

以下、図面を参照しながら、本発明の実施の形態を説明する。

図1は、本発明による面光源装置の一つの実施形態を示す模式的斜視図である。図1に示されているように、本発明の面光源装置は、対向する2つの側端面を光入射面31とし、これと略直交する一つの表面を光出射面33とする導光体3と、この導光体3の光入射面31に配置され光源リフレクタ2で覆われた一次光源1と、導光体3の光出射面上に配置された光偏向素子4と、導光体3の光出射面33の裏面34に配置された光反射素子5とから構成される。

【0013】

導光体3は、XY面と平行に配置されており、全体として矩形板状をなしている。導光体3は4つの側端面を有しており、そのうちYZ面と平行な1対の側端面を光入射面31とする。各光入射面31は一次光源1と対向して配置されており、一次光源1から発せられた光は光入射面31から導光体3内へと入射する。

【0014】

導光体3の光入射面31に略直交した2つの主面は、それぞれXY面と略平行に位置しており、いずれか一方の面（図では上面）が光出射面33となる。この光出射面33またはその裏面34のうちの少なくとも一方の面に粗面からなる指向性光出射機能部や、プリズム列、レンチキュラーレンズ列、V字状溝等の多数のレンズ列を光入射面31と略平行に形成したレンズ面からなる指向性光出射機能部などを付与することによって、光入射面31から入射した光を導光体3中を導光させながら光出射面33から光入射面31および光出射面33に直交する面（XZ面）内の出射光光度分布において指向性のある光を出射させる。このXZ

面内における出射光光度分布のピークの方向が光出射面33となす角度を α とすると、この角度 α は10～40度とすることが好ましく、出射光光度分布の半値全幅は10～50度とすることが好ましい。

【0015】

導光体3の表面に形成する粗面やレンズ列は、ISO4287/1-1984による平均傾斜角 θ_a が0.5～1.5度の範囲のものとすることが、光出射面33内での輝度の均齊度を図る点から好ましい。平均傾斜角 θ_a は、さらに好ましくは1～1.2度の範囲であり、より好ましくは1.5～1.1度の範囲である。この平均傾斜角 θ_a は、導光体3の厚さ(t)と入射光が伝搬する方向の長さ(L)との比(L/t)によって最適範囲が設定されることが好ましい。すなわち、導光体3として L/t が20～200程度のものを使用する場合は、平均傾斜角 θ_a を0.5～7.5度とすることが好ましく、さらに好ましくは1～5度の範囲であり、より好ましくは1.5～4度の範囲である。また、導光体3として L/t が20以下程度のものを使用する場合は、平均傾斜角 θ_a を7～12度とすることが好ましく、さらに好ましくは8～11度の範囲である。

【0016】

導光体3に形成される粗面の平均傾斜角 θ_a は、ISO4287/1-1984に従って、触針式表面粗さ計を用いて粗面形状を測定し、測定方向の座標を x として、得られた傾斜関数 $f(x)$ から次の(1)式および(2)式を用いて求めることができる。ここで、 L は測定長さであり、 Δa は平均傾斜角 θ_a の正接である。

【0017】

【数1】

$$\Delta a = (1/L) \int_0^L |(d/Dx)f(x)| dx \quad \dots \quad (1)$$

$$\theta a = \tan^{-1}(\Delta a) \quad \dots \quad (2)$$

さらに、導光体3としては、その光出射率が0.5～5%の範囲にあるものが

好ましく、より好ましくは1～3%の範囲である。これは、光出射率が0.5%より小さくなると導光体3から出射する光量が少くなり十分な輝度が得られなくなる傾向にあり、光出射率が5%より大きくなると一次光源1近傍で多量の光が出射して、光出射面33内でのX方向における光の減衰が著しくなり、光出射面33での輝度の均齊度が低下する傾向にあるためである。このように導光体3の光出射率を0.5～5%とすることにより、光出射面から出射する光の出射光光度分布(XZ面内)におけるピーク光の角度(ピーク角度)が光出射面の法線に対し50～90度の範囲にあり、出射光光度分布(XZ面内)の半値全幅が10～50度であるような指向性の高い出射特性の光を導光体3から出射させることができ、その出射方向を光偏向素子4で効率的に偏向させ高い輝度を有する光源装置を提供することができる。

【0018】

本発明において、導光体3からの光出射率は次のように定義される。一方の一次光源1のみを点灯した場合の光出射面33の光入射面31側の端縁での出射光の光強度(I_0)と光入射面31側の端縁から距離Lの位置での出射光強度(I)との関係は、導光体3の厚さ(Z方向寸法)をtとすると、次の(3)式のような関係を満足する。

【0019】

【数2】

$$I = I_0 \cdot A (1 - \alpha)^{L/t} \dots (3)$$

ここで、定数Aが光出射率であり、光出射面33における光入射面31と直交するX方向での単位長さ(導光体厚さtに相当する長さ)当たりの導光体3から光が出射する割合(%)である。この光出射率Aは、縦軸に光出射面23からの出射光の光強度の対数と横軸に(L/t)をプロットすることで、その勾配から求めることができる。

【0020】

また、指向性光出射機能部が付与されていない他の主面には、導光体3からの出射光の光入射面31と平行な面（YZ面）での指向性を制御するために、光入射面31に対して略垂直の方向（X方向）に延びる多数のレンズ列を配列したレンズ面を形成することが好ましい。図1に示した実施形態においては、光出射面33に粗面を形成し、裏面34に光入射面31に対して略垂直方向（X方向）に延びる多数のレンズ列の配列からなるレンズ面を形成している。本発明においては、図1に示した形態とは逆に、光出射面33にレンズ面を形成し、裏面34を粗面とするものであってもよい。

【0021】

図1に示したように、導光体3の裏面34あるいは光出射面33にレンズ列を形成する場合、そのレンズ列としては略X方向に延びたプリズム列、レンチキュラーレンズ列、V字状溝等が挙げられるが、YZ方向の断面の形状が略三角形状のプリズム列とすることが好ましい。

【0022】

本発明において、導光体3に形成されるレンズ列としてプリズム列を形成する場合には、その頂角を70～150度の範囲とすることが好ましい。これは、頂角をこの範囲とすることによって導光体3からの出射光を十分集光することができ、光源装置としての輝度の十分な向上を図ることができるためである。すなわち、プリズム頂角をこの範囲内とすることによって、出射光光度分布（XZ面内）におけるピーク光を含みXZ面に垂直な面（YZ面）において出射光光度分布の半值全幅が35～65度である集光された出射光を出射させることができ、光源装置としての輝度を向上させることができる。なお、プリズム列を光出射面33に形成する場合には、頂角は80～100度の範囲とすることが好ましく、プリズム列を裏面34に形成する場合には、頂角は70～80度または100～150度の範囲とすることが好ましい。

【0023】

なお、本発明では、上記のような光出射面33またはその裏面34に光出射機能部を形成する代わりにあるいはこれと併用して、導光体内部に光拡散性微粒子

を混入分散することで指向性光出射機能を付与したものでもよい。また、導光体3としては、図1に示したような断面形状に限定されるものではなく船型状等の種々の断面形状のものが使用できる。

【0024】

図2は、光偏向素子4のプリズム列の形状の説明図であり、光偏向素子4は主表面の一方を入光面41とし他方の面を出光面42とする。入光面41には多数のプリズム列が略並列に配列され、各プリズム列は一次光源側に位置する第1のプリズム面44と一次光源から遠い側に位置する第2のプリズム面45の2つのプリズム面から構成されている。図2に示した実施形態においては、第1のプリズム面44および第2のプリズム面45がそれぞれ3つの傾斜角の異なる平面46～48および49～51から構成され、出光面に近い平面ほど傾斜角が大きくなっている。また、平面46～51のうち、第1のプリズム面44を構成する最も出光面に近い平面48と最も出光面から遠い平面46との傾斜角の差が15度以下となっており、第2のプリズム面45を構成する最も出光面に近い平面51と最も出光面から遠い平面49との傾斜角の差も15度以下となっている。なお、本発明において、平面の傾斜角とはプリズム列形成平面43に対する各平面の傾斜角度をいう。

【0025】

本発明の光偏向素子4は、第1のプリズム面44および第2のプリズム面45をそれぞれ傾斜角の異なる少なくとも2つの平面または凸曲面より構成し、これら平面または凸曲面の傾斜角が出光面に近いほど大きくなり、最も出光面に近い平面または凸曲面と最も出光面から遠い平面または凸曲面との傾斜角の差を15度以下とすることにより、極めて高い集光効果を発揮させることができ、光源装置として極めて高い輝度を得ることができる。この最も出光面に近い平面または凸曲面と最も出光面から遠い平面または凸曲面との傾斜角の差は、好ましくは0.5～10度の範囲であり、より好ましくは1～7度の範囲である。また、第1のプリズム面44および第2のプリズム面45をこのような構造にすることにより、所望の集光性を有する偏向素子を容易に設計することができるとともに、一定の光学特性を有する光偏向素子を安定して製造することもできる。

【0026】

次に、本発明の光偏向素子のプリズム面の形状について説明する。一つの平面からなるプリズム面で全反射され出射した光は、プリズム面の全反射する部位に依存してかなり広い範囲で分散しており、この各部位からの出射光輝度分布（X Z面内）におけるピーク光を、各部位のプリズム面の傾斜角をそれぞれ調整し、すべての部位でピーク角度を略同方向に出射させることによって、大部分の出射光を特定方向に集中して出射させることができることが可能となる。このとき、各部位におけるプリズム面の傾斜角を、出光面42に近い部位ほど傾斜角を大きくするようにすることによって、プリズム面全体で全反射される出射光を一定の方向に集光させることができ、より指向性が高く、ピーク強度の大きな光を出射することができる。

【0027】

このプリズム面の部位としては、少なくとも2つのエリアを設定すればよいが、このエリア数（傾斜角の異なる平面の数）が少なすぎると、光偏向素子による集光性が低下し、輝度向上効果が損なわれる傾向にあるため、3つ以上とすることが好ましく、より好ましくは5つ以上、さらに好ましくは6つ以上である。この場合、集光特性を向上させるためには、出光面42に最も近いエリアの傾斜角と出光面42から最も遠いエリアの傾斜角の差が15度以下とすることが必要であり、好ましくは0.5～10度の範囲、より好ましくは1～7度の範囲である。

【0028】

一方、このエリア数を多くすると、プリズム面で全面にわたってピーク角度を細かく調整することができるため、全体としての集中度を高めることができるが、傾斜角の異なる平面を細かく形成しなければならず、光偏向素子のプリズム面を形成するための金型切削用のバイトの設計や製造が複雑となるとともに、一定の光学特性を有する光偏向素子を安定して得ることも難しくなる。このため、プリズム面に形成するエリア数は20以下とすることが好ましく、より好ましくは12以下である。このプリズム面の分割は均等に分割することが好ましいが、必ずしも均等に分割する必要はなく、所望のプリズム面全体の出射光輝度分布（X Z

面内）に応じて調整することができる。また、異なる傾斜角を有する各平面の幅（プリズム列断面における各平面部分の長さ）は、プリズム列のピッチに対して4～47%の範囲とすることが好ましく、より好ましくは6～30%、さらに好ましくは7～20%の範囲である。

【0029】

本発明においては、例えば、図3および図4に示したように、上記のような異なる傾斜角を有する平面の少なくとも1つを凸曲面とすることもでき、全ての平面を凸曲面としてもよい。図3では、第1のプリズム面44および第2のプリズム面45を、それぞれ4つのエリアに分割し、3つの平面52～54および55～57と1つの凸曲面58および59から構成している。図4では、第1のプリズム面44および第2のプリズム面45を2つのエリアに分割し、形状の異なる2つの凸曲面60、61および62、63から構成している。図中、64～67は凸曲面60～63の形状を決定する非球面形状である。また、第1のプリズム面44および第2のプリズム面45を分割した各エリアの境界を通るような曲面で構成することもでき、この場合、輝度の大幅な低下を招かない範囲であれば曲面は各エリアの境界から多少ずれてもよい。例えば、曲面の通過位置（プリズム頂部からの距離）のプリズム列のピッチに対する割合のエリアの境界の割合に対するずれが4%以下であればよく、より好ましくは2%以下、さらに好ましくは1%以下の範囲である。なお、本発明において、凸曲面における傾斜角は、1つの凸曲面の全ての位置における傾斜角を平均したものという。このように、プリズム面を異なる傾斜角の複数の凸曲面で構成した場合には、異なる傾斜角の平面により構成する場合と比較して、エリア数は少なくすることができ、2～10のエリア数とすることができます、好ましくは2～5の範囲である。しかし、エリア数が少なすぎると所望の出射光輝度分布（XZ面内）を調整するための各凸曲面の設計が困難となるため、エリア数は3～5の範囲とすることがより好ましい。

【0030】

また、凸曲面の形状は、そのXZ方向の断面形状が球面あるいは非球面の一部とすることができます。さらに、複数の凸曲面によりプリズム面を構成する場合には、各凸曲面の形状が異なることが好ましく、球面形状の凸曲面と非球面形状の

凸曲面とを組み合わせることもできるが、少なくとも1つの凸曲面を非球面形状とすることが好ましい。複数の凸曲面を球面形状とする場合には、各凸曲面でその曲率を変えたものであってもよい。非球面形状としては、橢円形状の一部、放物線形状の一部等が挙げられる。

【0031】

さらに、凸曲面は、その曲率半径（ r ）をプリズム列のピッチ（ P ）との比（ r/P ）が2～50の範囲とすることが好ましく、より好ましくは5～30、さらに好ましくは7～10の範囲である。この r/P が2未満であったり、50を超えると、十分な集光特性を発揮できなくなり、輝度が低下する傾向にある。

【0032】

また、このような構成によるプリズム列においては、図2に示したように、プリズム列のプリズム頂部からの高さを h 、プリズム列全体の高さを H とした場合に、少なくとも h/H が10%以上となる高さ h の領域に傾斜角の異なる平面あるいは凸曲面を少なくとも2つ形成することが好ましく、3つ以上形成することがより好ましい。これは、このような高さ h の領域に平面あるいは凸曲面を2つ以上形成することにより十分な集光特性が得られる傾向にあるためである。高さ h の領域は、より好ましくは h/H が15%以上となる領域であり、さらに好ましくは20%以下となる領域である。なお、プリズム面で全反射され出光面から出射した光の出射光輝度分布（XZ面内）における強度は、 h/H が60%以下の領域でプリズム面全体で全反射され出光面から出射した光の出射光輝度分布（XZ面内）における強度の75%以上を占めることになるため、 h/H は60%以下の範囲とすることで十分な効果を得ることができる。

【0033】

全反射され出光面から出射した光の出射光輝度分布（XZ面内）における強度は、プリズム面全体で全反射され出光面から出射した光の出射光輝度分布（XZ面内）における強度の75%以上を占めることになるためである。高さ h の領域は、より好ましくは h/H が15%以上となる領域であり、さらに好ましくは20%以下となる領域である。なお、高さ h の領域が小さくなりすぎると十分な集光特性が得られなくなる傾向になるとともに、金型の製造が複雑になることから

、 h/H は20%以上であることが好ましい。この場合の高さ h の領域におけるエリア数は、1~8の範囲とすることが好ましく、より好ましくは1~6、さらに好ましくは2~4の範囲である。

【0034】

また、プリズム面が傾斜角の異なる複数の平面あるいは凸曲面より構成されるとき、十分な集光特性を確保するためには、プリズム列の頂部と底部とを結ぶ仮想平面Q（図2、15、16）と複数の平面あるいは凸曲面（実際のプリズム面）との最大距離 d がプリズム列のピッチ（P）に対する割合（ d/P ）で0.4~5%とすることが好ましい。これは、 d/P が0.4%未満あるいは5%を超えると、集光特性が低下する傾向にあり、十分な輝度向上を図れなくなる傾向にあるためであり、より好ましくは0.4~3%の範囲であり、さらに好ましくは0.7~2.2%の範囲である。

【0035】

本発明において、プリズム列の頂角は集光特性や光の利用効率を考えると、50~80度とすることが好ましく、より好ましくは50~70度の範囲であり、さらに好ましくは60~70度の範囲である。また、プリズム頂角の法線に対する左右の振り分け角（2つのプリズム面の法線に対する傾斜角度） α 、 β は、光源側に位置する振り分け角 α を25~40度、 β を25~40度の範囲とすることが好ましい。この頂角の振り分け角 α 、 β は、対向する2つの光入射面に配置した一次光源1からのそれぞれの光の出射光輝度分布（XZ面内）におけるピーク角度を略同一方向とするため、略同一の角度とすることが好ましい。また、光利用効率を高くして輝度をより向上させるとともに、観察方向の変化による輝度の低下をより小さくするためには、振り分け角 α と β の差の絶対値（ $|\alpha - \beta|$ ）を0~10度とすることが好ましく、より好ましくは0~10度、さらに好ましくは0~8度の範囲である。なお、出射光輝度分布（XZ面内）におけるピーク光を略法線方向以外とする場合は、プリズム頂角の振り分け角 α 、 β を調整することによって、所望の方向にピーク光を有する出射光輝度分布（XZ面内）を得ることができる。

【0036】

また、本発明の光偏向素子は、隣接するプリズム列の間にプリズム列の傾斜角よりも傾斜角の小さい凸形状や平面（光透過領域）を形成してもよい。このような光透過領域を形成することにより、液晶パネル側から入射した外光をこの部分から光源装置内に導入することができ、導光体の裏面に配置された反射シート5により反射し、再び液晶パネル側に出射することにより、外光も有効に利用することができる。このとき、反射シート5により反射した外光の均一性を維持するため、反射シートに微弱な拡散性を付与したり、光偏向素子の出光面に光拡散層を形成したり、光偏向素子の出光面に光拡散シートを載置することが好ましい。また、外光の利用効率を高めると、バックライトとしての光の利用効率が低下するため、使用形態等を考慮して光透過領域の割合を決めることが必要である。例えば、光透過領域の幅は、プリズム列のピッチの20～50%の範囲とすることが好ましく、より好ましくは20～40%の範囲である。光透過領域としては、平面形状、曲面形状や多角形状等が挙げられる。中でも、光透過領域を多角形状や曲面とすることにより、外光の反射を制御することができるため好ましい。

【0037】

本発明のような光偏向素子を用いた光源装置においては、第1のプリズム面44および第2のプリズム面45を1つの曲面で構成した場合には、光偏向素子から出射する光の出射光輝度分布（XZ面内）が急激に低下し、観察方向が少し変わるだけで大きな輝度の低下を招く。本発明においては、プリズム面44、45を傾斜角の異なる複数の平面あるいは凸曲面より構成することで、光偏向素子から出射する光の出射光輝度分布（XZ面内）において、図5に示したような輝度がピーク輝度の70%となる出射光分布幅（θ₇₀）を10度以上とすることができ、観察方向の変化による急激な輝度の低下を緩和することができる。この出射角分布幅（θ₇₀）は、より好ましくは15度以上であり、さらに好ましくは18度以上である。

【0038】

さらに、本発明においては、光偏向素子から出射する光の出射光輝度分布（XZ面内）において、図5に示したような輝度がピーク輝度の90%となる出射光

分布幅 (θ_{90}) と輝度がピーク輝度の 20 % となる出射光分布幅 (θ_{20}) との比 (θ_{20}/θ_{90}) が 5 以下であることが好ましく、より好ましくは 4 以下、さらに好ましくは 3.5 以下である。 θ_{20}/θ_{90} を 5 以下とすることにより、実用上問題のない程度まで観察方向の変化による急激な輝度の低下を緩和することができる。

【0039】

本発明における光偏向素子 4 の狭視野化は、導光体 3 の光出射面 33 からの出射光光度分布 (XZ 面内) の広がりの程度 (半值全幅) に影響されるため、光偏向素子 4 の出光面 42 からの出射光輝度分布 (XZ 面内) の半值全幅 A の導光体 3 の光出射面 33 からの出射光光度分布 (XZ 面内) の半值全幅 B に対する割合も、導光体 3 からの出射光光度分布 (XZ 面内) の半值全幅 B によって変わる。例えば、導光体 3 からの出射光光度分布 (XZ 面内) の半值全幅 B が 26 度未満の場合には、半值全幅 A が半值全幅 B の 30 ~ 95 % の範囲であることが好ましく、より好ましくは 30 ~ 80 % の範囲であり、さらに好ましくは 30 ~ 70 % の範囲である。また、導光体 3 からの出射光光度分布 (XZ 面内) の半值全幅 B が 26 度以上の場合には、半值全幅 A が半值全幅 B の 30 ~ 80 % の範囲であることが好ましく、より好ましくは 30 ~ 70 % の範囲であり、さらに好ましくは 30 ~ 60 % の範囲である。

【0040】

一般に導光板の出射効率を高めようすると、導光体 3 からの出射光光度分布 (XZ 面内) の半值全幅 B は大きくなり集光効率は低下するように思えるが、実際は上記のように狭視野化の効果は大きくなるため、狭視野化の効率および面光源装置としての光利用効率という点では出射光光度分布 (XZ 面内) の半值全幅 B が 26 度以上である導光体との組み合わせで光偏向素子を使用することが好ましく、より好ましくは半值全幅 B が 36 度を超える導光体である。また、導光体 3 からの出射光光度分布 (XZ 面内) の半值全幅が小さい場合には狭視野化の効果は小さくなるが、導光体 3 からの出射光光度分布 (XZ 面内) の半值全幅が小さいものほど高輝度化を図ることができるため、高輝度化という点では出射光光度分布 (XZ 面内) の半值全幅 B が 26 度未満である導光体との組み合わせで光

偏向素子を使用することが好ましい。

【0041】

一次光源1はY方向に延在する線状の光源であり、例えば蛍光ランプや冷陰極管を用いることができる。なお、本発明においては、一次光源1としては線状光源に限定されるものではなく、LED光源、ハロゲンランプ、メタハロランプ等のような点光源を使用することもできる。また、光源リフレクタ2は一次光源1の光をロスを少なく導光体3へ導くものである。材質としては、例えば表面に金属蒸着反射層有するプラスチックフィルムを用いることができる。図1に示されているように、光源リフレクタ2は、光反射素子5の端縁部外面から一次光源1の外面を経て光偏向素子4の出光面端縁部へと巻きつけられている。他方、光源リフレクタ2は、光偏向素子4を避けて、光反射素子5の端縁部外面から一次光源1の外面を経て導光体3の光出射面端縁部へと巻きつけることも可能である。

【0042】

このような光源リフレクタ2と同様な反射部材を、導光体3の側端面31以外の側端面に付することも可能である。光反射素子5としては、例えば表面に金属蒸着反射層を有するプラスチックシートを用いることができる。本発明においては、光反射素子5として反射シートに代えて、導光体3の裏面34に金属蒸着等により形成された光反射層等とすることも可能である。

【0043】

本発明の導光体3及び光偏向素子4は、光透過率の高い合成樹脂から構成することができる。このような合成樹脂としては、メタクリル樹脂、アクリル樹脂、ポリカーボネート系樹脂、ポリエステル系樹脂、塩化ビニル系樹脂が例示できる。特に、メタクリル樹脂が、光透過率の高さ、耐熱性、力学的特性、成形加工性に優れており、最適である。このようなメタクリル樹脂としては、メタクリル酸メチルを主成分とする樹脂であり、メタクリル酸メチルが80重量%以上であるものが好ましい。導光体3及び光偏向素子4の粗面の表面構造やプリズム列等の表面構造を形成するに際しては、透明合成樹脂板を所望の表面構造を有する型部材を用いて熱プレスすることで形成してもよいし、スクリーン印刷、押出成形や射出成形等によって成形と同時に形状付与してもよい。また、熱あるいは光硬

化性樹脂等を用いて構造面を形成することもできる。更に、ポリエステル系樹脂、アクリル系樹脂、ポリカーボネート系樹脂、塩化ビニル系樹脂、ポリメタクリルイミド系樹脂等からなる透明フィルムあるいはシート等の透明基材上に、活性エネルギー線硬化型樹脂からなる粗面構造またレンズ列配列構造を表面に形成してもよいし、このようなシートを接着、融着等の方法によって別個の透明基材上に接合一体化させてもよい。活性エネルギー線硬化型樹脂としては、多官能（メタ）アクリル化合物、ビニル化合物、（メタ）アクリル酸エステル類、アリル化合物、（メタ）アクリル酸の金属塩等を使用することができる。

【0044】

以上のような一次光源1、光源リフレクタ2、導光体3、光偏向素子4および光反射素子5からなる面光源装置の発光面（光偏向素子4の出光面42）上に、液晶表示素子を配置することにより液晶表示装置が構成される。液晶表示装置は、図1における上方から液晶表示素子を通して観察者により観察される。また、本発明においては、十分にコリメートされた狭い分布の光を面光源装置から液晶表示素子に入射させることができるために、液晶表示素子での階調反転等がなく明るさ、色相の均一性の良好な画像表示が得られるとともに、所望の方向に集中した光照射が得られ、この方向の照明に対する一次光源の発光光量の利用効率を高めることができる。

【0045】

さらに、本発明においては、このように光偏向素子4によって狭視野化され高輝度化された光源装置において、輝度の低下をできる限り招くことなく、視野範囲を目的に応じて適度に制御するために、光偏向素子4の出光面上に光拡散素子6を隣接配置することもできる。また、このように光拡散素子6を配置することによって、品位低下の原因となるぎらつきや輝度斑等を抑止し品位向上を図ることもできる。

【0046】

光拡散素子6は、光偏向素子4の出光面側に光偏向素子4と一体化させてもよいし、光拡散素子6を個別に光偏向素子4の出光面側に載置してもよいが、個別に光拡散素子6を配置することが好ましい。個別に光拡散素子6を載置する場合

には、光拡散素子6の光偏向素子4に隣接する側の面には、光偏向素子4とのステイッキングを防止するため、凹凸構造を付与することが好ましい。同様に、光拡散素子6の出射面においても、その上に配置される液晶表示素子との間でのステイッキングを考慮する必要があり、光拡散素子6の出射面にも凹凸構造を付与することが好ましい。この凹凸構造は、ステイッキング防止の目的のみに付与する場合には、平均傾斜角が0.7度以上となるような構造とすることが好ましく、さらに好ましくは1度以上であり、より好ましくは1.5度以上である。

【0047】

本発明においては、輝度特性、視認性および品位等のバランスを考慮して光偏向素子4からの出射光を適度に拡散させる光拡散特性を有する光拡散素子6を使用することが必要である。すなわち、光拡散素子6の光拡散性が低い場合には、視野角を十分に広げることが困難となり視認性を低下させるとともに、品位改善効果が十分でなくなる傾向にあり、逆に光拡散性が高すぎる場合には光偏向素子4による狭視野化の効果が損なわれるとともに、全光線透過率も低くなり輝度が低下する傾向にある。そこで、本発明の光拡散素子6においては、平行光を入射したときの出射光光度分布(XZ面内)の半値全幅が1~13度の範囲であるものが使用される。光拡散素子6の半値全幅は、好ましくは3~11度の範囲、さらに好ましくは4~8.5度の範囲である。なお、本発明において光拡散素子6の出射光光度分布(XZ面内)の半値全幅とは、図7に示すように、光拡散素子6に入射した平行光線が出射時にどの程度拡散して広がるかを示したもので、光拡散素子6を透過し拡散した光の出射光光度分布(XZ面内)におけるピーク値に対する半値での広がり角の全幅の角度($\Delta\theta_H$)をいう。

【0048】

このような光拡散特性は、光拡散素子6中に光拡散剤を混入したり、光拡散素子6の少なくとも一方の表面に凹凸構造を付与することによって付与することができる。表面に形成する凹凸構造は、光拡散素子6の一方の表面に形成する場合と両方の表面に形成する場合とでは、その程度が異なる。光拡散素子6の一方の表面に凹凸構造を形成する場合には、その平均傾斜角を0.8~12度の範囲とすることが好ましく、さらに好ましくは3.5~7度であり、より好ましくは4

～6.5度である。光拡散素子6の両方の表面に凹凸構造を形成する場合には、一方の表面に形成する凹凸構造の平均傾斜角を0.8～6度の範囲とすることが好ましく、さらに好ましくは2～4度であり、より好ましくは2.5～4度である。この場合、光拡散素子6の全光線透過率の低下を抑止するためには、光拡散素子6の入射面側の平均傾斜角を出射面側の平均傾斜角よりも大きくすることが好ましい。また、光拡散素子6のヘイズ値としては8～82%の範囲とすることが、輝度特性向上と視認性改良の観点から好ましく、さらに好ましくは30～70%の範囲であり、より好ましくは40～65%の範囲である。

【0049】

本発明の光源装置においては、その発光面（光拡散素子6の出射面）の法線方向から観察した場合の表示エリア内における輝度が均一であることも要求される。この輝度の均一性は光源の表示エリアの大きさにも依存し、例えば、ノートパソコンやモニター等の表示エリアが大きい大型の光源装置では、比較的広い視野角特性が要求される場合があり、発光面からの出射する出射光光度分布（XZ面内）をより広くすることが要求される。一方、携帯電話や携帯情報端末等の表示エリアが小さい小型の光源装置では、高輝度や表示品位向上が優先される場合があり、発光面からの出射する出射光光度分布（XZ面内）は比較的狭くてもよい。このため、光拡散素子6としては、光源装置の表示エリアの大きさに応じて適切な光拡散特性を有するものを使用することが好ましい。

【0050】

本発明の光源装置は、デスクトップ型パソコンのモニター、液晶テレビ等の比較的サイズが大きい表示装置に好適である。このような表示装置に使用する場合、比較的広い視野角が必要であるとともに高い輝度が必要となり、一次光源1としては導光体3の対向する2つの端面にそれぞれ1個以上の冷陰極管を配置した多灯型のものが使用される。このような光源装置では、一灯型の一次光源1を用いたものとは品位に関する視認性が異なり、後述するような出射光光度分布（XZ面内）の非対称性はその特性を失い、光源装置の中央部付近の出射光光度分布（XZ面内）は、図9に示したように、光拡散素子6を使用しない場合でも対称性が向上する。さらに、光源に近い両端部近傍での出射光光度分布（XZ面内）

は、それぞれ最も近いところから導光される光の影響をうけ、若干非対称性を帶びた出射光光度分布（X Z面内）となる。すなわち、図9の左側の端部近傍では、光源側の出射光光度分布（X Z面内）が急激に低下し、中央側の出射光光度分布（X Z面内）は滑らかなティリング傾向を有しているため、左端部近傍での光の出射方向はやや中央部へ向いている成分が多くなっている。一方、図9の右側の端部近傍では、これと反対の出射光光度分布（X Z面内）を有しており、光の出射方向はやや中央部へ向いている成分が多くなっている。このため、中央部から両端部近傍を観察したときの視認性に優れた出射光特性が得られ、端部まで高品位な、高い輝度を有する光源装置となる。光拡散素子6としては、広い視野角を得る光拡散性が必要とされ、出射光光度分布（X Z面内）の半值全幅が6～13度の範囲のものを使用することが好ましく、さらに好ましくは6.5～11度、より好ましくは7～9度の範囲である。また、ヘイズ値としては、50～82%の範囲であることが好ましく、さらに好ましくは60～75%、より好ましくは65～70%の範囲である。さらに、光拡散素子6の表面に凹凸構造を形成する場合には、その平均傾斜角が4.5～12度の範囲であることが好ましく、さらに好ましくは5.5～8.5度、より好ましくは6～7度の範囲である。

【0051】

本発明の光源装置においては、上記のような光拡散素子6を用いる場合、光偏向素子4からの出射光輝度分布（X Z面内）の半值全幅が19～26度程度の集光性が比較的弱い光偏向素子4を使用するとともに、光拡散性の比較的弱い光拡散素子6を使用した方がYZ面での拡散による輝度の低下を抑えられるため、輝度向上の観点からは好ましい場合がある。この場合、光拡散素子6としては、広い視野角を得る光拡散性が必要とされ、出射光光度分布（X Z面内）の半值全幅が1～8度の範囲のものを使用することが好ましく、さらに好ましくは2～8度、より好ましくは3～7度の範囲である。また、ヘイズ値としては、8～70%の範囲であることが好ましく、さらに好ましくは30～65%、より好ましくは40～60%の範囲である。さらに、光拡散素子6の一方の表面に凹凸構造を形成する場合には、その平均傾斜角が0.8～7度の範囲であることが好ましく、さらに好ましくは3～6.5度、より好ましくは3.5～6度の範囲である。凹

凸構造を両面に形成する場合には、その一方の表面の平均傾斜角が0.8～4度の範囲であることが好ましく、さらに好ましくは1～4度、より好ましくは2～4度の範囲である。

【0052】

本発明においては、光拡散素子6として光拡散性に異方性を有するものを使用することが、光拡散素子6の全光線透過率を高め、光偏向素子4からの出射光を効率的に拡散でき、輝度を向上させることができるために好ましい。例えば、導光体3の一つの端面に線上の冷陰極管を一次光源1として配置した光源装置においては、狭視野化を図る光偏向素子4では、導光体3の光出射面から出射する出射光をXZ面において主として狭視野化を図るものであり、さらに光拡散素子6により狭視野化されたXZ面の光を主として拡散させ視野角を広げることを目的としている。しかし、光拡散素子6として等方性拡散性のものを使用した場合には、光偏向素子により狭視野化されていないYZ面の光も同等に拡散されるため、輝度の低下を招くことになる。そこで、図10に示したように、XZ面よりもYZ面での光拡散性が高いような異方拡散性を有する光拡散素子6を使用することにより、光偏向素子4により狭視野化されたXZ面の光を強く拡散し、狭視野化されていないYZ面の光の拡散を弱くすることができ、光偏向素子4からの出射光を効率的に拡散することができ、輝度の低下をできる限り最小に抑えることができる。

【0053】

このような光拡散素子6の異方拡散性については、どのような異方性を有する光拡散素子6を使用するかは、上記のようにXZ面とYZ面での異方性に限定されるものではなく、導光体3の光出射機構、光偏向素子4のレンズ形状や配列、光源装置の用途等に応じて適宜選定することができる。すなわち、図11に示したように、光拡散素子6の出射面に対する法線軸を含む任意の面（ZP-n面（n=1, 2, ...））を想定し、これらの任意の面における出射光光度分布（XZ面内）の半値全幅を相違させることによって異方性を付与することができる。なお、ZP-n面の中で最も大きい半値全幅を最大半値全幅、最も小さい半値全幅を最小半値全幅とする。同様に、光拡散素子6に異方拡散性を付与する凹凸

構造の平均傾斜角についても、ZP-n面と光拡散素子6（XY面）が交差する任意のP-n方向における平均傾斜角を相違させることによって平均傾斜角の異方性を付与することができる。このとき、P-n方向の中で最も大きい平均傾斜角を最大平均傾斜角、最も小さい平均傾斜角を最小平均傾斜角とする。

【0054】

例えば、導光体3のYZ面と平行な対向する2つの側端面に線状の冷陰極管を配置し一次光源1とした場合、光偏向素子4は主としてXZ面で狭視野化を主として図り、YZ面では殆ど作用しないため、XZ面で効果的に出射光を拡散し、YZ面では出射光を拡散させないような異方拡散性を有する光拡散素子6を使用することが最適である。従って、光拡散素子6としては、XZ面で最大半值全幅を示し、YZ面で最小半值全幅を示すような異方拡散性を有するものが好ましい。同様に、光拡散素子6に形成する凹凸構造も、X方向に最大平均傾斜角を有し、Y方向に最小平均傾斜角を有するような構造あるいは配置とすることが好ましい。

【0055】

このような異方拡散性を有する光拡散素子6においても、輝度特性、視認性および品位等のバランスを考慮して光偏向素子4からの出射光を適度に拡散させる光拡散特性を有する光拡散素子6を使用することが必要である。すなわち、光拡散素子6の光拡散性が低い場合には、視野角を十分に広げることが困難となり視認性を低下させるとともに、品位改善効果が十分でなくなる傾向にあり、逆に光拡散性が高すぎる場合には光偏向素子4による狭視野化の効果が損なわれるとともに、全光線透過率も低くなり輝度が低下する傾向にある。そこで、出射光光度分布（XZ面内）の最大半值全幅が1～13度の範囲であるものが使用され、好ましくは3～11度の範囲、さらに好ましくは4～9度の範囲である。また、最小半值全幅に対する最大半值全幅の比（最大半值全幅／最小半值全幅）が1.1～2.0の範囲であることが好ましく、さらに好ましくは2～15の範囲、より好ましくは4～10の範囲である。これは、最大半值全幅／最小半值全幅を1.1以上とすることによって光の利用効率を向上させ輝度を高めることができるためであり、2.0以下とすることによって強い光拡散性による輝度の低下を抑止する

ことができるためである。

【0056】

光拡散素子6の一方の表面に凹凸構造を形成する場合には、その最大平均傾斜角を0.8～15度の範囲とすることが好ましく、さらに好ましくは3.5～11度であり、より好ましくは4～9度である。また、最大半値全幅／最小半値全幅と同様の観点から、最小平均傾斜角に対する最大平均傾斜角の比（最大平均傾斜角／最小平均傾斜角）は、1.1～20の範囲であることが好ましく、さらに好ましくは2～15の範囲、より好ましくは4～10の範囲である。凹凸構造は、光拡散素子6の両方の表面に形成してもよく、この場合、光拡散素子6の全光線透過率の低下を抑止するためには、光拡散素子6の入射面側の平均傾斜角を出射面側の平均傾斜角よりも大きくすることが好ましい。また、光拡散素子6のヘイズ値としては8～82%の範囲とすることが、輝度特性向上と視認性改良の観点から好ましく、さらに好ましくは30～70%の範囲であり、より好ましくは40～65%の範囲である。

【0057】

このような異方拡散性を有する光拡散素子6の拡散性付与構造としては、例えば、図12～14に示したような凹凸構造が挙げられる。図12に示した凹凸構造は、一軸上に長く伸びたレンチキュラーレンズ列等の多数のレンズ列を略並列して連設した配列構造である。このようなレンズ列の配列ピッチは表示装置として使用される液晶素子のピッチおよび光偏向素子4のプリズム列等のレンズ列の配列ピッチに対してモアレの発生しにくいピッチを選定するか、ランダムな配列ピッチとすることが好まし。通常、レンズ列の配列ピッチは1～70μmの範囲とすることが好ましく、製造の容易さやモアレの発生を防止する観点から5～40μmがさらに好ましく、より好ましくは10～30μmの範囲である。また、レンズ列の長手方向と直交する方向の平均傾斜角は0.8～15度の範囲とすることが輝度向上と視認性の観点から好ましく、さらに好ましくは3.5～11度、より好ましくは4～9度の範囲である。

【0058】

図13に示した凹凸構造は、多数のシリンドリカルレンズ形状体を離散的に配

列した構造である。シリンドリカルレンズ形状体の配列間隔は、一定の規則的なピッチでもよく、ランダムな配列ピッチであってもよい。通常、シリンドリカルレンズ形状体の配列ピッチは、 $1 \sim 70 \mu\text{m}$ の範囲とすることが好ましく、製造の容易さやモアレの発生を防止する観点から $5 \sim 40 \mu\text{m}$ がさらに好ましく、より好ましくは $10 \sim 30 \mu\text{m}$ の範囲である。また、シリンドリカルレンズ形状体の長手方向と直交する方向の平均傾斜角は $0.8 \sim 15$ 度とすることが輝度向上と視認性の観点から好ましく、さらに好ましくは $3.5 \sim 11$ 度、より好ましくは $4 \sim 9$ 度の範囲である。このような離散的な配列構造は、光拡散素子6として最大半値全幅であることが必要な面と光拡散素子6の出射面との交差する線と、シリンドリカルレンズ形状体の長手方向が略直交する量的確率が高くなるように配列することが好ましい。また、光拡散素子6として最小半値全幅であることが必要な面と光拡散素子6の出射面と交差する線と、シリンドリカルレンズ形状体の長手方向が略平行になる量的確率が高くなるよう配列することが好ましい。

【0059】

図14に示した凹凸構造はヘアライン構造である。ヘアラインの延びる方向に直交方向の平均傾斜角は $0.8 \sim 15$ 度とすることが輝度向上と視認性の観点から好ましく、さらに好ましくは $3.5 \sim 11$ 度、より好ましくは $4 \sim 9$ 度の範囲である。ヘアラインの延びる方向は、光拡散素子6として最大半値全幅であることが必要な面と光拡散素子6の出射面との交差する線と略直交する方向が好ましい。

【0060】

このような異方拡散性を付与する凹凸構造が形成された面およびその裏面の少なくとも一方にマット構造を付与することにより、ぎらつきや輝度斑等を抑止することができ品位を向上させることができる。しかし、マット構造の光拡散性が強くなると異方拡散性が損なわれ輝度の低下を招く場合があるため、比較的光拡散性の弱いマット構造を付与することが好ましい。このようなマット構造としては、平均傾斜角度が $0.5 \sim 5$ 度の範囲のものが好ましく、さらに好ましくは $0.8 \sim 4$ 度、より好ましくは $1 \sim 3.5$ 度の範囲である。なお、異方性付与凹凸構造の表面にマット構造を付与した場合のマット構造の平均傾斜角は、凹凸構造

に起因する平均傾斜角度を除いたマット構造自体の平均傾斜角をいう。すなわち、凹凸構造の無い部分や凹凸構造の長手方向に平行な平均傾斜角を測定することができ、触針粗さ計による計測、光拡散素子6の断面形状を画像解析する方法、原子間力顕微鏡等によって測定することができる。

【0061】

本発明においては、光偏向素子4を用いて導光体3からの出射光を法線方向等の特定な方向に出射させ、この出射光を異方拡散性を有する光拡散素子6を用いて所望の方向に出射させることもできる。この場合、光拡散素子6に異方拡散作用と光偏向角作用の両方の機能を付与することもできる。例えば、凹凸構造としてレンチキュラーレンズ列やシリンドリカルレンズ形状体を用いたものでは、その断面形状を非対称形状にすることで、異方拡散作用と光偏向作用の両機能を付与することができる。

【0062】

また、本発明においては、光源装置としての視野角を調整し、品位を向上させる目的で、光偏向素子4や光拡散素子6に光拡散材を含有させることもできる。このような光拡散材としては、光偏向素子4や光拡散素子6を構成する材料と屈折率が異なる透明な微粒子を使用することができ、例えば、シリコンビーズ、ポリスチレン、ポリメチルメタクリレート、フッ素化メタクリレート等の単独重合体あるいは共重合体等が挙げられる。光拡散材としては、光偏向素子4による狭視野効果や光拡散素子6による適度な拡散効果を損なわないように、含有量、粒径、屈折率等を適宜選定する必要がある。例えば、光拡散材の屈折率は、光偏向素子4や光拡散素子6を構成する材料との屈折率差が小さすぎると拡散効果が小さく、大きすぎると過剰な散乱屈折作用が生じるため、屈折率差が0.01～0.1の範囲とすることが好ましく、さらに好ましくは0.03～0.08、より好ましくは0.03～0.05の範囲である。また、拡散材の粒径は、粒径が大きすぎると散乱が強くなりぎらつきや輝度の低下を引き起こし、小さすぎると着色が発生するため、平均粒径が0.5～20μmの範囲とすることが好ましく、さらに好ましくは2～15μm、より好ましくは2～10μmの範囲である。

【0063】

【実施例】

以下、実施例によって本発明を具体的に説明する。

なお、以下の実施例における各物性の測定は下記のようにして行った。

【0064】

面光源装置の法線輝度、光度半値全幅の測定

光源として冷陰極管を用い、インバータ（ハリソン社製H I U-742A）にDC12Vを印加して高周波点灯させた。輝度は、面光源装置あるいは導光体の表面を20mm四方の正方形に3×5分割し、各正方形の法線方向の輝度値の15点平均を求めた。導光体の光度半値全幅は、導光体の表面に4mmφのピンホールを有する黒色の紙をピンホールが表面の中央に位置するように固定し、輝度計の測定円が8～9mmとなるように距離を調整し、冷陰極管の長手方向軸と垂直方向および平行方向でピンホールを中心にゴニオ回転軸が回転するように調節した。それぞれの方向で回転軸を+80°～-80°まで0.5°間隔で回転させながら、輝度計で出射光の光度分布（XZ面内）を測定し、法線方向の輝度、ピーク角度、光度分布（XZ面内）の半値全幅（ピーク値の1/2の分布（XZ面内）の広がり角）、出射光分布幅（θ90、θ70、θ20）を求めた。なお、ピーク角度は、法線方向に対して光源側に傾いている場合を負の値とし、光源から遠い側に傾いている場合を正の値とした。

【0065】

平均傾斜角（θa）の測定

ISO4287/1-1987に従って、触針として010-2528（1μmR、55°円錐、ダイヤモンド）を用いた触針式表面粗さ計（東京精器（株）製サーフコム570A）にて、粗面の表面粗さを駆動速度0.03mm/秒で測定した。この測定により得られたチャートより、その平均線を差し引いて傾斜を補正し、前記式（1）式および（2）式によって計算して求めた。

【0066】

実施例1～9

アクリル樹脂（三菱レイヨン（株）製アクリペットVH5#000）を用い射出成形することによって一方の面が平均傾斜角8度のマットで、他方の面に導光

体の光入射面に直交する方向に延びるプリズム頂角100度、ピッチ $50\mu\text{m}$ のプリズム列が並列して連設配列された $210\text{mm} \times 300\text{mm}$ 、厚さ6mmの14インチの導光体を作製した。導光体の長さ300mmの辺（長辺）に対応する両方の側端面に沿って冷陰極管を光源リフレクター（麗光社製銀反射フィルム）で覆い配置した。さらに、その他の側端面に光拡散反射フィルム（東レ社製E60）を貼付し、プリズム列配列（裏面）に反射シートを配置した。以上の構成を枠体に組み込んだ。この導光体は、光入射面および光出射面の双方に垂直な面内での出射光光度分布（XZ面内）の最大ピーク角度は光出射面法線方向に対して63度、半値全幅は44度であった。

【0067】

一方、屈折率1.5064のアクリル系紫外線硬化性樹脂を用いて、表1に示したように、プリズム列を構成する両方のプリズム面（第1のプリズム面および第2のプリズム面）をプリズム頂部からプリズム列の高さ（ h' ）までを平面（表1に示した傾斜角）とし、残りの出光面に近い側の面を曲率半径 r の凸曲面（表1に示した傾斜角）で構成したピッチ $56.5\mu\text{m}$ のプリズム列が略並列に連設されたプリズム列形成面を、厚さ $125\mu\text{m}$ のポリエステルフィルムの一方の表面に形成したプリズムシートを作製した。この際、凸曲面の曲率半径（ r ）とプリズム列のピッチ（ P ）との比（ r/P ）、両方のプリズム面の仮想平面との最大距離（ d ）とプリズム列のピッチ（ P ）との比（ d/P ）は表1に示した通りであった。

【0068】

得られたプリズムシートを、上記導光体の光出射面側にプリズム列形成面が向き、導光体の光入射面にプリズム稜線が平行となるように載置し、面光源装置を得た。この面光源装置の光入射面および光出射面の双方に垂直な面内での出射光輝度分布（XZ面内）を求め、比較例1を基準とした場合のピーク輝度比率、ピーク角度、ピーク輝度の1/2の輝度を有する角度（半値全幅）、ピーク輝度の90%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{90} ）とピーク輝度の20%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{20} ）との比（ θ_{20}/θ_{90} ）、ピーク輝度の70%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{70} ）を表1に示した。なお、実施例4および6

については、その出射光輝度分布（X Z面内）を図6に示した。

【0069】

比較例1

プリズムシートのプリズム列を、2つのプリズム面がともに平面であり、プリズム頂角が60.8度である断面二等辺三角形（ $\alpha = \beta = 30.4$ 度）とした以外は、実施例1と同様にして面光源装置を得た。この面光源装置の光入射面および光出射面の双方に垂直な面内での出射光輝度分布（X Z面内）を求める、ピーク輝度を1.00とし、ピーク角度、ピーク輝度の1/2の輝度を有する角度（半値全幅）、ピーク輝度の90%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{90} ）とピーク輝度の20%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{20} ）との比（ θ_{20}/θ_{90} ）、ピーク輝度の70%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{70} ）を表1に示した。なお、出射光輝度分布（X Z面内）を図6に示した。

【0070】

比較例2

プリズムシートのプリズム列を、2つのプリズム面がともに平面であり、プリズム頂角が65.4度である断面二等辺三角形（ $\alpha = \beta = 32.7$ 度）とした以外は、実施例1と同様にして面光源装置を得た。この面光源装置の光入射面および光出射面の双方に垂直な面内での出射光輝度分布（X Z面内）を求める、比較例1を基準とした場合のピーク輝度比率、ピーク角度、ピーク輝度の1/2の輝度を有する角度（半値全幅）、ピーク輝度の90%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{90} ）とピーク輝度の20%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{20} ）との比（ θ_{20}/θ_{90} ）、ピーク輝度の70%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{70} ）を表1に示した。なお、出射光輝度分布（X Z面内）を図6に示した。

【0071】

【表1】

プリズム頂角(°)	平面、凸曲面の傾斜角(°)		h'(μm)	h'/H (%)	凸曲面半径r(μm)	r/P (%)	d/P (%)	ピーグ輝度比	ピーグ角度(°)	半值全幅(°)	θ_{20}/θ_{90}	θ_{70} (°)					
	α	β															
実施例1	32.0	32.0	平面	58.0	凸曲面	62.0	17.1	34.1	452	8.00	1.79	1.05	11.1	29.7	1.53	26.7	
実施例2	32.0	32.0	平面	58.0	凸曲面	60.0	21.1	44.6	452	8.00	1.01	1.15	6	24.4	2.93	14.8	
実施例3	32.0	32.0	平面	58.0	凸曲面	60.0	17.1	36.0	452	8.00	1.13	1.14	7	24.3	2.62	16.4	
実施例4	32.0	32.0	平面	58.0	凸曲面	60.0	13.4	28.0	452	8.00	0.94	1.13	8	23.3	2.41	18.1	
実施例5	34.0	34.0	平面	56.0	凸曲面	62.0	22.1	47.0	452	8.00	2.55	1.18	1	24.2	3.76	21.4	
実施例6	32.7	32.7	平面	57.3	凸曲面	59.0	17.4	38.0	452	8.00	0.99	1.23	4	21.4	3.80	11.0	
実施例7	34.0	34.0	平面	56.0	凸曲面	62.0	17.9	37.1	452	8.00	2.46	1.13	3	26.4	2.40	24.4	
実施例8	34.0	34.0	平面	56.0	凸曲面	58.0	17.9	41.0	452	8.00	0.98	1.36	0	17.3	8.50	6.7	
実施例9	36.0	36.0	平面	54.0	凸曲面	60.0	18.9	43.0	452	8.00	2.40	1.06	0	18.4	4.07	14.6	
比較例1	30.4	30.4		59.6			—	—	—	—	—	—	—	0	33.6	5.44	21.3
比較例2	32.7	32.7		57.3			—	—	—	—	—	0.94	1	28.9	3.07	21.5	

実施例 1 0

プリズム列を構成する両方のプリズム面を、表2に示したように、プリズム頂部からプリズム列の高さ $17.1 \mu m$ (h') までを傾斜角 58.0 度の平面 ($\beta = 32.0$ 度)、プリズム列の高さ $17.1 \mu m$ 以上を傾斜角 62.0 度の平面とする2つの平面 (プリズム頂部側からエリア1、2) で構成した以外は、実施例1と同様にしてプリズムシートを作製した。

【0072】

得られたプリズムシートを、実施例1の導光体の光出射面側にプリズム列形成面が向き、導光体の光入射面にプリズム稜線が平行となるように載置し、面光源装置を得た。この面光源装置の光入射面および光出射面の双方に垂直な面内での出射光輝度分布 (X Z面内) を求め、比較例1を基準とした場合のピーク輝度比率、ピーク角度、ピーク輝度の $1/2$ の輝度を有する角度 (半値全幅)、ピーク輝度の 90% の輝度を有する出射光分布幅 (θ_{90}) とピーク輝度の 20% の輝度を有する出射光分布幅 (θ_{20}) との比 (θ_{20}/θ_{90})、ピーク輝度の 70% の輝度を有する出射光分布幅 (θ_{70}) を表2に示した。この際、両方のプリズム面の仮想平面との最大距離 (d) とプリズム列のピッチ (P) との比 (d/P) は表2に示した通りであった。

【0073】

実施例 1 1

プリズム列を構成する両方のプリズム面を、表2に示したように、プリズム頂部からプリズム列の高さ $17.1 \mu m$ (h') までを傾斜角 58.0 度の平面 ($\beta = 32.0$ 度)、プリズム列の高さ $17.1 \mu m$ 以上を傾斜角 60.0 度の平面とする2つの平面 (プリズム頂部側からエリア1、2) で構成した以外は、実施例1と同様にしてプリズムシートを作製した。

【0074】

得られたプリズムシートを、実施例1の導光体の光出射面側にプリズム列形成面が向き、導光体の光入射面にプリズム稜線が平行となるように載置し、面光源装置を得た。この面光源装置の光入射面および光出射面の双方に垂直な面内での出射光輝度分布 (X Z面内) を求め、比較例1を基準とした場合のピーク輝度比

率、ピーク角度、ピーク輝度の $1/2$ の輝度を有する角度（半値全幅）、ピーク輝度の90%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{90} ）とピーク輝度の20%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{20} ）との比（ θ_{20}/θ_{90} ）、ピーク輝度の70%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{70} ）を表2に示した。この際、両方のプリズム面の仮想平面との最大距離（d）とプリズム列のピッチ（P）との比（d/P）は表2に示した通りであった。

【0075】

実施例12

プリズム列を構成する両方のプリズム面を、表2に示したように、プリズム頂部からプリズム列の高さ $17.4\mu\text{m}$ （ h' ）までを傾斜角57.3度の平面（ $\beta=32.7$ 度）、プリズム列の高さ $17.4\sim31.0\mu\text{m}$ までを傾斜角58.0度の平面、プリズム列の高さ $31.0\mu\text{m}$ 以上を傾斜角60.0度の平面とする3つの平面（プリズム頂部側からエリア1、2、3）で構成した以外は、実施例1と同様にしてプリズムシートを作製した。

【0076】

得られたプリズムシートを、実施例1の導光体の光出射面側にプリズム列形成面が向き、導光体の光入射面にプリズム稜線が平行となるように載置し、面光源装置を得た。この面光源装置の光入射面および光出射面の双方に垂直な面内での出射光輝度分布（XZ面内）を求め、比較例1を基準とした場合のピーク輝度比率、ピーク角度、ピーク輝度の $1/2$ の輝度を有する角度（半値全幅）、ピーク輝度の90%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{90} ）とピーク輝度の20%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{20} ）との比（ θ_{20}/θ_{90} ）、ピーク輝度の70%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{70} ）を表2に示した。この際、両方のプリズム面の仮想平面との最大距離（d）とプリズム列のピッチ（P）との比（d/P）は表2に示した通りであった。

【0077】

実施例13

プリズム列を構成する両方のプリズム面を、表2に示したように、プリズム頂部からプリズム列の高さ $16.4\mu\text{m}$ （ h' ）までを傾斜角60.0度の平面（

$\beta = 30.0$ 度)、プリズム列の高さ $16.4 \sim 33.0 \mu\text{m}$ までを傾斜角 60.5 度の平面、プリズム列高さ $33.0 \mu\text{m}$ 以上を傾斜角 63.4 度の 3 つの平面 (プリズム頂部側からエリア 1、2、3) で構成した以外は、実施例 1 と同様にしてプリズムシートを作製した。

【0078】

得られたプリズムシートを、実施例 1 の導光体の光出射面側にプリズム列形成面が向き、導光体の光入射面にプリズム稜線が平行となるように載置し、面光源装置を得た。この面光源装置の光入射面および光出射面の双方に垂直な面内での出射光輝度分布 (XZ 面内) を求め、比較例 1 を基準とした場合のピーク輝度比率、ピーク角度、ピーク輝度の $1/2$ の輝度を有する角度 (半值全幅)、ピーク輝度の 90% の輝度を有する出射光分布幅 (θ_{90}) とピーク輝度の 20% の輝度を有する出射光分布幅 (θ_{20}) との比 (θ_{20}/θ_{90})、ピーク輝度の 70% の輝度を有する出射光分布幅 (θ_{70}) を表 2 に示した。この際、両方のプリズム面の仮想平面との最大距離 (d) とプリズム列のピッチ (P) との比 (d/P) は表 2 に示した通りであった。

【0079】

実施例 14

プリズム列を構成する両方のプリズム面を、表 2 に示したように、プリズム頂部からプリズム列の高さ $10.2 \mu\text{m}$ (h') までを傾斜角 57.1 度の平面 ($\beta = 32.9$ 度)、プリズム列の高さ $10.2 \sim 21.0 \mu\text{m}$ までを傾斜角 58.9 度の平面、プリズム列の高さ $21.0 \mu\text{m}$ 以上を曲率半径 $400 \mu\text{m}$ の球面形状の凸曲面 (傾斜角 = 60.0 度、凸曲面部の弦のプリズム形成面の法線となす角 = 31.1 度) とする 2 つの平面と 1 つの凸曲面 (プリズム頂部側からエリア 1、2、3) から構成した以外は、実施例 1 と同様にしてプリズムシートを作製した。

【0080】

得られたプリズムシートを、実施例 1 の導光体の光出射面側にプリズム列形成面が向き、導光体の光入射面にプリズム稜線が平行となるように載置し、面光源装置を得た。この面光源装置の光入射面および光出射面の双方に垂直な面内での

出射光輝度分布（X Z面内）を求め、比較例1を基準とした場合のピーク輝度比率、ピーク角度、ピーク輝度の1/2の輝度を有する角度（半値全幅）、ピーク輝度の90%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{90} ）とピーク輝度の20%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{20} ）との比（ θ_{20}/θ_{90} ）、ピーク輝度の70%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{70} ）を表2に示した。この際、両方のプリズム面の仮想平面との最大距離（d）とプリズム列のピッチ（P）との比（d/P）は表2に示した通りであった。

【0081】

実施例15

プリズム列を構成する両方のプリズム面を、表2に示したように、プリズム頂部からプリズム列の高さ10.7 μm （h'）までを短軸の曲率半径400 μm 、長軸の曲率半径800 μm の非球面形状の凸曲面（曲率半径=400 μm 、傾斜角=56.6度、 $\beta=33.7$ 度）、プリズム列の高さ21.3 μm 以上を曲率半径400 μm の球面形状の凸曲面（傾斜角=64.0度、凸曲面部の弦のプリズム形成面の法線となす角=26.0度）とする2つの凸曲面（プリズム頂部側からエリア1、2）から構成した以外は、実施例1と同様にしてプリズムシートを作製した。

【0082】

得られたプリズムシートを、実施例1の導光体の光出射面側にプリズム列形成面が向き、導光体の光入射面にプリズム稜線が平行となるように載置し、面光源装置を得た。この面光源装置の光入射面および光出射面の双方に垂直な面内での出射光輝度分布（X Z面内）を求め、比較例1を基準とした場合のピーク輝度比率、ピーク角度、ピーク輝度の1/2の輝度を有する角度（半値全幅）、ピーク輝度の90%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{90} ）とピーク輝度の20%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{20} ）との比（ θ_{20}/θ_{90} ）、ピーク輝度の70%の輝度を有する出射光分布幅（ θ_{70} ）を表2に示した。この際、両方のプリズム面の仮想平面との最大距離（d）とプリズム列のピッチ（P）との比（d/P）は表2に示した通りであった。

【0083】

【表2】

プリズム頂角(°)	平面、凸曲面の傾斜角(°)				h' (μm)	h'/H (%)	d/P (%)	ビーカ輝度比	ビーカ角度(°)	半値全幅(°)	θ_{20}/θ_{80}	θ_{70} (°)				
	α	β	エリア1	エリア2												
実施例10	32.0	32.0	平面	58.0	平面	62.0	—	—	17.1	34.1	1.62	0.99	6	33.3	1.97	26.4
実施例11	32.0	32.0	平面	58.0	平面	60.0	—	—	17.1	36.0	2.09	1.10	1	28.1	1.29	21.8
実施例12	32.7	32.7	平面	57.3	平面	58.0	平面	60.0	17.4	37.9	0.95	1.22	2	21.6	4.82	14.7
実施例13	30.0	30.0	平面	60.0	平面	60.5	平面	63.4	16.4	31.7	1.30	0.92	9	36.3	2.32	29.9
実施例14	32.9	32.9	平面	57.1	平面	58.9	凸曲面	60.0	10.2	21.5	1.01	1.15	6	26.5	2.53	15.6
実施例15	33.7	33.7	凸曲面	56.6	凸曲面	64.0	—	—	10.7	19.7	3.88	0.95	11	33.1	2.19	27.4

【0084】**【発明の効果】**

以上説明したように、本発明によれば、光偏向素子の入光面に形成されるプリズム列の両方のプリズム面を傾斜角の異なる複数の平面あるいは凸曲面から構成することにより、高い集光効果による輝度の向上を図るとともに、観察方向の変化に対する輝度の低下が小さく、一次光源の光量の利用効率の向上が可能となり（即ち、一次光源から発せられる光を所要の観察方向へ集中して出射させる効率が高くなり）、しかも簡素化された構成で画像品位の向上が容易な光源装置を提供することはできる。

【図面の簡単な説明】**【図1】**

本発明による光源装置を示す模式的斜視図である。

【図2】

本発明の光偏向素子の入光面のプリズム列の形状の説明図である。

【図3】

本発明の光偏向素子の入光面のプリズム列の形状の説明図である。

【図4】

本発明の光偏向素子の入光面のプリズム列の形状の説明図である。

【図5】

光偏向素子からの各種出射光輝度分布（X Z面内）を示す説明図である。

【図6】

光偏向素子からの各種出射光輝度分布（X Z面内）を示すグラフである。

【図7】

出射光光度分布（X Z面内）の半値全幅の説明図である。

【図8】

光源装置の展開長の説明図である。

【図9】

本発明の光源装置の光偏向素子からの出射光輝度分布（X Z面内）を示す説明図である。

【図10】

本発明の光拡散素子の異方拡散性の出射光光度分布（X Z面内）を示す説明図である。

【図11】

本発明の光偏向素子の異方拡散性の説明図である。

【図12】

本発明の異方拡散性を有する光偏向素子の凹凸構造を示す概略図である。

【図13】

本発明の異方拡散性を有する光偏向素子の凹凸構造を示す概略図である。

【図14】

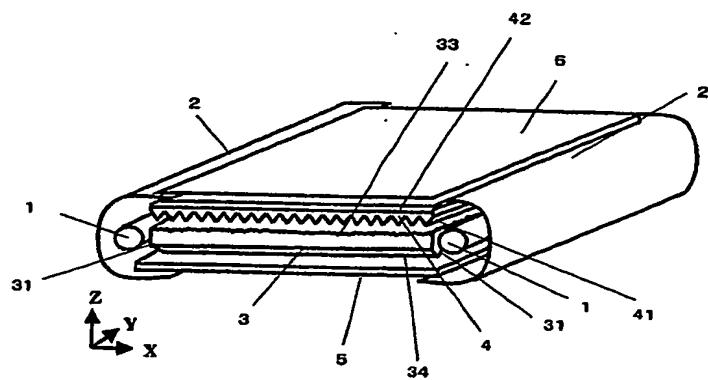
本発明の異方拡散性を有する光偏向素子の凹凸構造を示す概略図である。

【符号の説明】

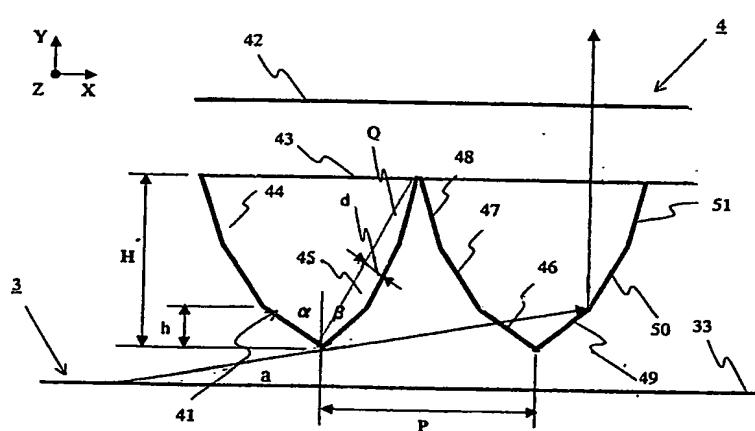
- 1 一次光源
- 2 光源リフレクタ
- 3 導光体
- 4 光偏向素子
- 5 光反射素子
- 6 光拡散素子
- 3 1 光入射面
- 3 3 光出射面
- 3 4 裏面
- 4 1 入光面
- 4 2 出光面

【書類名】 図面

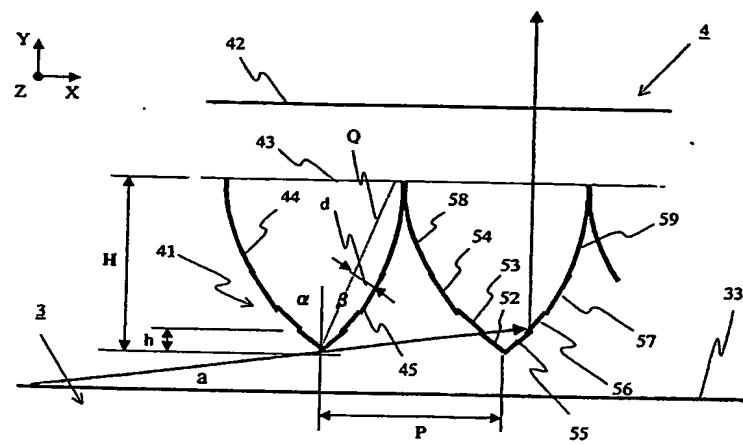
【図1】



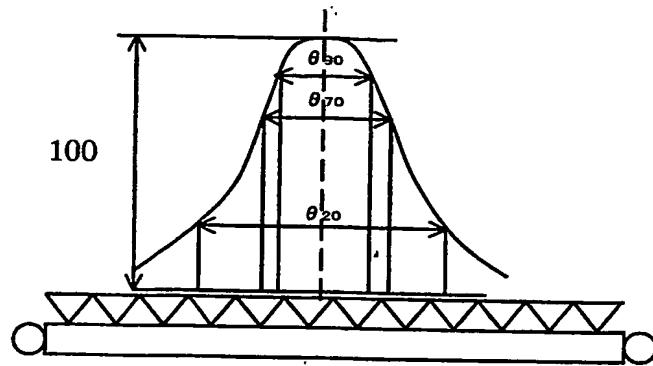
【図2】



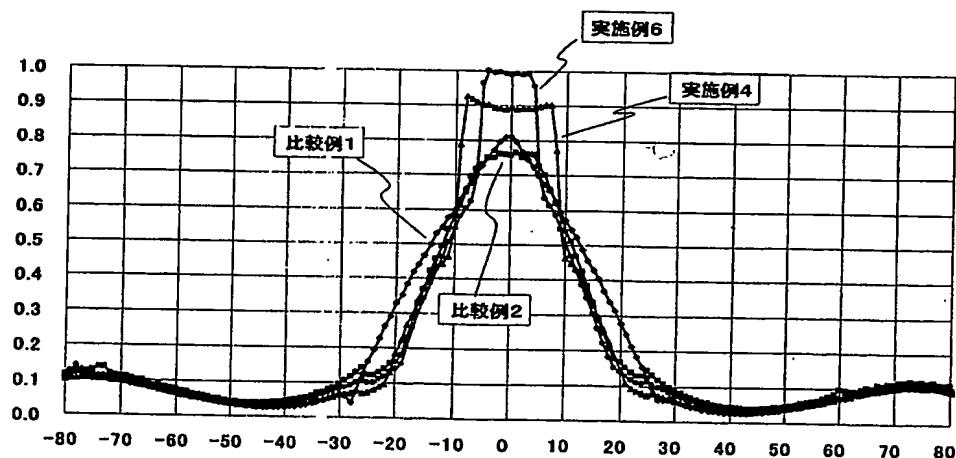
【図3】



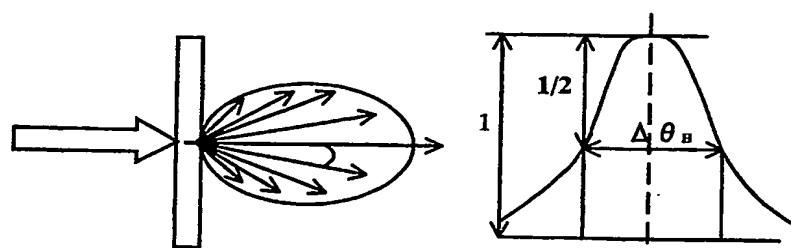
【図5】



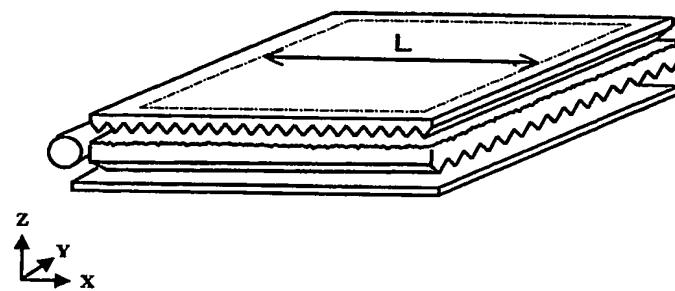
【図6】



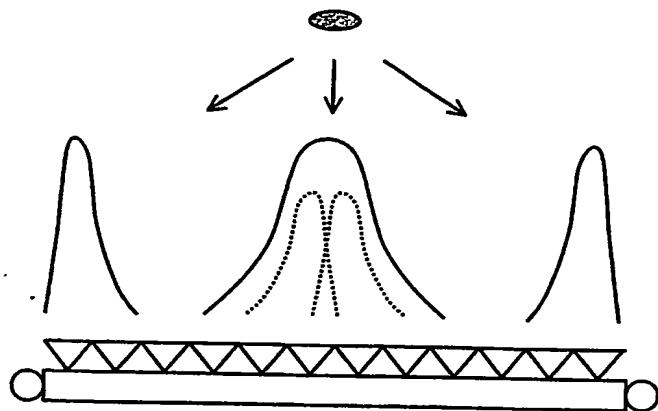
【図7】



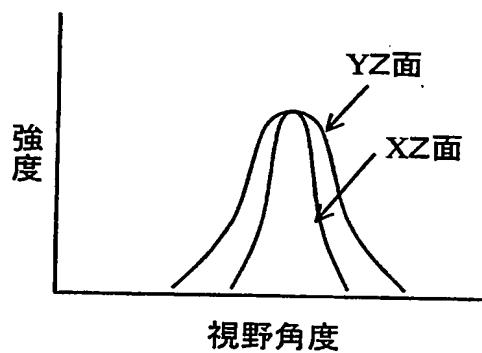
【図8】



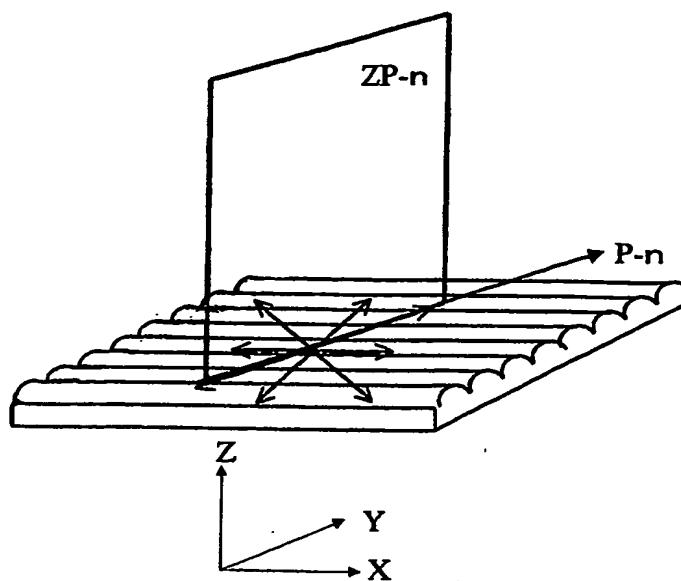
【図9】



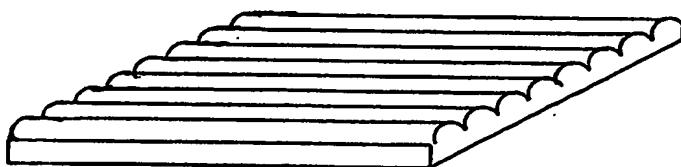
【図10】



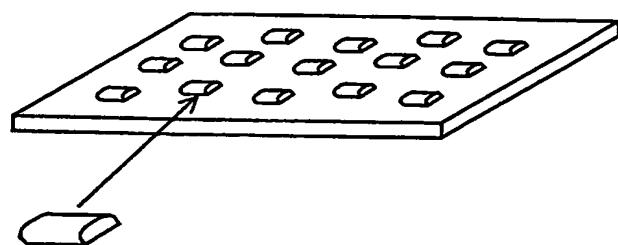
【図11】



【図12】



【図13】



【図14】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 高い集光効果による輝度の向上を図れるとともに、観察方向の変化に対する輝度の低下が小さく、簡素化された構成で画像品位の向上が容易な光源装置を提供する。

【解決手段】 光を入射する入光面とその反対側に位置し入射した光を出射する出光面とを有しており、入光面には2つのプリズム面から構成されるプリズム列が互いに略並列に複数配列され、2つのプリズム面が少なくとも2つの傾斜角の異なる平面からなり、出光面に近い側に位置する平面ほどその傾斜角が大きく、出光面に最も近い平面の傾斜角と出光面から最も遠い平面の傾斜角の差が15度以下である光偏向素子を用いた光源装置。

【選択図】 図1

特願2002-183233

出願人履歴情報

識別番号

[000006035]

1. 変更年月日 1998年 4月23日

[変更理由] 住所変更

住 所 東京都港区港南一丁目6番41号
氏 名 三菱レイヨン株式会社